

# 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

## 1. 研究課題

舞台上で街頭で——60年代は踊りをどう変革したか(日仏比較舞踊学の試み)

On the Stage, in the Street: How The Sixties Changed The Dance (A Comparative Dance Study in Japan and France).

## 2. 研究代表者氏名

北原 まり子

Kitahara Mariko

## 3. 研究期間

2018年12月 - 2019年03月

## 4. 研究目的

1968年の「五月革命」から50周年を迎えたフランスで、舞踊学では初めて、当時の舞踊界の動向に焦点をあてた研究書が出版されることになった(I.ロネ、S.パジェス編『*Danser en 68, Perspectives internationales*』2018年12月刊行)。これは、2014年に発表されたパリ第八大学舞踊学科のチームの研究成果(『*Danser en Mai 68*』)に基礎を置いている。それによれば、フランスの舞踊家たちは当時、より認知されていた姉妹芸術(音楽、演劇等)と同等の地位を求め社会的な活動を行った一方、実験的・政治扇動的作品をほとんど生み出さなかったという。日本の同時期の「政治の季節」も、とりわけ舞踊学の分野ではほとんど顧みられない。1959年に創始された暗黒舞踏が、「肉体」という言葉とともに当時の社会的機運を反映していたと認識されるのみである。日本の舞踊家たちは政治活動にグループとして参加することはわずかであったが(舞踊人青年協議会等)、1960年安保闘争前後に若い世代の台頭と実験的な試みの噴出が見られ、フランスの状況とまさにコントラストを示している。当時の状況を調査し、貴重な証言を集めて、フランスの先行研究を基礎にその時期を分析することで、日本の舞踊界の特殊性を新たに発見できると考える。

## 5. 研究成果の概要

60年代「政治の季節」と舞踊界の関係を明らかにする研究は、当時ポスト・モダンダンスが興隆したアメリカではすでにあつたが、80年代のヌーヴェル・ダンスに歴史的重点を置いてきたフランスでは2014年によく口火が切られたばかりであつた。日本に関して言えば、そもそも政治的な活動と舞踊芸術を結びつける研究がほとんど存在せず、演劇研究でしばしば論じられる60年安保闘争や68年の大学紛争との関わりは、暗黒舞踏派を例外として、舞踊にお

いては皆無であったかのように見なされている。本研究では、50・60年代の膨大な量の『週刊音楽新聞』を通覧することにより、当時の舞踊家達の政治活動の痕跡を発見した。また、そうして収集した作品群の中に現れる「黒人」表象に注目することで、政治的な主題が革新的なダンス美学を生み出した事実を指摘し、日本の戦後舞踊史に新たな視点を導入した。さらに、日仏の共同研究のかたちで議論を重ねたことにより、一国の舞踊のケーススタディを超えて、自民族中心主義の視点を回避する、踊る身振りの世界的な循環という歴史的展望を提示するに至った。

#### 6. 共同研究会に関連した公表実績

- ・公開シンポジウム「街頭で、劇場で、舞踊の60年代——アクション／リアクション(日本とフランスの比較を通じて)」(2019年2月27日、東京大学駒場キャンパス)
- ・公開講演会「戦後のフランスのダンス状況と1978年の舞踏ショック」(2019年2月28日、慶應義塾大学三田キャンパス)
- ・研究論文「舞台上、街頭で——60年代は踊りをどう変革したか」北原まり子『舞踊學』、東京：舞踊学会、2020年3月発行

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究会の成果をふまえ、北原と宮川は、学術誌『舞踊學』(舞踊学会)に「舞台上、街頭で——60年代は踊りをどう変革したか」を投稿した(査読中、掲載は2020年3月末を予定)。今回の研究では、フランスとの比較から日本の60年代の舞踊界を分析しその特殊性を明らかにすること、また、体系的に収集した膨大な量の資料から一つの概観を導き出すことに重点が置かれ、それらの目標を達成することができた。60年安保闘争を主題にした作品群や、「黒人」を表象する作品群など、いくつかのテーマ研究にも着手したが、それらはより詳細な作品分析を通して今後深められていくべき対象である。今後の展開として、テーマ別の研究とその成果の発表(学会発表、論文等)、また国際比較舞踊研究として、この日仏共同研究の成果をフランスでも発表することを考えている。その始めとして、2019年4月6日に開催されるパリ第八大学舞踊学科の教員及び大学院生の集まりで、パジェス氏と共に本研究会の概要と成果について報告する予定である。